

2019年1月NHK近畿地方放送番組審議会

1月のNHK近畿地方放送番組審議会は、16日(水)、NHK大阪放送局において、11人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、バリバラ「“きょうだい”の悩み」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、2月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	篠 雅廣	(大阪市立美術館 館長)
副委員長	山崎 弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会 会長)
委員	市田 恭子	(デザイナー集団 Team coccori 事業代表)
	帯野 久美子	(関西経済同友会 常任幹事)
	小林 祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	矢崎 和彦	((株)フェリシモ 代表取締役社長)
	安井 良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舖 恵子	(京都リビング新聞社 編集部長)

(主な発言)

<バリバラ「“きょうだい”の悩み」(12月16日(日))について>

- 日常的に考えるテーマではないので、とっつきにくいと感じたが、番組を見ているうちにどんどん引き込まれた。知的障害の姉のいる、NHKディレクターの実体験に基づいて構成されていたので、説得力があり、心にとても響いた。“きょうだい”という視点から見た障害との向き合い方という制作意図は興味深かったし、ディレクターの人柄にも感銘を受けた。また、福祉施設にいるときのお姉さんの輝きには拍手を送りたくなった。人はどんな状況であれ、周りの人達から役割を与えられた時にこそ、人間性を回復するのだと改めて感じた。「バリバラ」という番組の存在を初めて知ったが、こういう番組こそ、総合テレビや、より多くの人達に見てもらえるような時間帯に放送してほしいと思うし、NHKスペシャルなどでも取り上げてもらいたいテーマだと思った。

- お姉さんの変わる様子を見て、障害のある人の意思を尊重することの大切さを改めて感じた。最近、障害者の方も一緒に走るマラソン大会もかなり増えているが、走ることが好きでも、家族の理解がないことも多く、大会に来ている人たちは本当にわずかだと聞いたことがある。この番組は、視聴者だけでなく、障害のある方の家族の意識づけにもなると思った。弟さんの「姉は人とは違う」ということばやディレクターの「姉は30歳になっても赤ちゃん」ということばは衝撃的だったが、まさに家族である当事者にしかわからないことで、「バリバラ」でなければなかなか踏み込めない、興味深い内容だと感じた。本人が行きたいと言っていたが、お姉さんが大阪に行ったところも見てみたいと思った。ただ、民放の番組のテーマ音楽が流れるパートがあったが、音楽とのギャップがかなりあり、その演出が気になった。司会の山本シュウさん含めて出演者のバランスもよく、あっという間に見ることができた。

- 最近の「バリバラ」は、タイトルがわかりやすく、興味を引かれることも多い。今回焦点をあてた当事者が、番組スタッフだということに驚いた。お姉さんが家族の中にいるときと、施設にいるときのギャップを浮き彫りにしていたが、お姉さんは家では一定の役割を演じなければいけないと思っているからだと思う。選択の自由が障害者にはないとよくいわれるが、お姉さんも服も選んだことがなく、好きな色の服も着たことがないということだった。ディレクターは、自分の家族のありのままを伝えていたが、かなりの覚悟が必要だったと思う。同じく福祉番組の「ハートネットTV」は、どちらかという問題提起をするドキュメンタリーのような番組で、見た後に悲しくなったり切なくなったりすることがよくあるが、「バリバラ」は明るくて見ていて楽しい。司会の山本さんのすばらしいファシリテーションと、コメンテーターの玉木幸則さんの皆の意見を受け止めてくれる包容力が大きな魅力だと感じている。また、「障害=かわいそう」ではなく、マイノリティーを隣人として取り上げており、潔さや爽やかさを感じる。「バリバラ」はEテレの中でも“ぶっ飛んでいる”感じが好きだが、私自身、最近、NHKの話題をするときに「真面目に“ぶっ飛んでいる”」という表現をしている。「紅白歌合戦」をはじめ、年々その度合いが大きくなっていると感じるが、「バリバラ」はその先駆的番組のように思う。

- 「バリバラ」を初めて見た時は、正直かなり驚いたが、本当にいい番組だと思う。ただ、障害者本人や、障害者の家族、周囲の人など、その立場によっていろいろな見方をされる番組だと思う。その関係性の一つが今回の“きょうだい”だが、いろいろな人がいろいろな見方をすることをわかったうえで、臆せず取り組んでいるところがすばらしいと思った。今回の「“きょうだい”の悩み」は、現実はまだもっと厳しいような気もするが、希望が見えたようにも思う。大人になればなるほどいろいろなこと

を考えてしまうが、25歳のディレクターの気持ちが素直に出ていたと思う。お姉さんが家と福祉施設では全然違うことを発見したディレクターが「今まで自分が言ってきたことを全部お姉ちゃんが理解していたとしたら大変なことだ」と話していて、それは本音だと思う。そこまで話ができしたのは、お姉さんとの距離がかなり近づいたのではないかと思う。見ている人にも“きょうだい”のことをもっと知らないといけなそうと思わせたのではないか。また、取材中、お姉さんはカメラの存在に気づいて、意識的に振る舞っていたのではないかと感じた。姉妹でテーマパークに出かける続編を見たいと思うが、お姉さんだけでなく、ディレクターの心の動きや大変さがわかる番組になることを期待している。

- 障害者の“きょうだい”の視点からの番組づくりには驚き、新鮮に感じた。「物心ついた時から、姉は家族みんなで守っていかないといけない存在で、姉の存在を隠したかった。」というのは非常に正直な感想で、しっかりと自分に向き合えないと言えないと思った。家庭では、お姉さんは食事も歯磨きも母親に介助されていて、おとなしく生活している一方で、通所している施設では、積極的に意思表示をしておしゃべりして笑い、料理の手伝いもしている姿を見たときには少し胸が痛くなった。外ではあれだけ能力があるのに、「きょうだいの集い」代表の持田恭子さんが言っていたように、関係性が近すぎて、親きょうだいの「守らないといけない」という気持ちを反映して、家庭の中では「姉はいつまでも赤ちゃんのまま」なのかと思った。2人での初めての外出の様子は、2人の優しさが感じられて、ほのぼのとした気持ちになった。花があれば歌って教えてくれたり、自分の好きな服をしっかりと選んだりとお姉さんは、積極的に意思表示ができていた。また、今、妹であるディレクターが生活している大阪のテーマパークによほど行きたいのだとしみじみ思った。少し気になった点を言うと、弟さんは前から施設でのお姉さんの様子を知っていたので、ご両親もかなり前から知っていたと思う。それなのに、なぜお母さんは、お姉さんの食事の介助をしているのだろうか。お母さんは何があっても娘を守っていかないといけないと今でも固く思っているのかと感じた。

- 「バリバラ」を初めて見たが、すばらしい番組だと感じた。最近になって障害者を取り上げたものもかなり出てきており、よい時代になったと思うが、「障害者でもこんなに頑張れる」など差し障りのないメッセージが多いように思う。それに対して今回の「バリバラ」では“きょうだい”からの視点でテーマを取り上げていて、ディレクターの家族にも当然苦悩も絶望もあると思うが、お姉さんをいとおしく思う家族の愛や戸惑いが素直に取り上げられていたところがよかった。さらに、もうひとつのテーマだと思ったのは、意思表示をどれぐらい引き出せるかということだと思う。大

阪に行きたいということは、好奇心があり、学習の可能性があるということだ。知的障害者も一般的な障害者と同じ教育の機会が与えられるべきだと常々考えているので、こうした課題もしっかりと取り上げてほしい。また、これからパラリンピックのニュースが随分出てくると思うが、パラリンピックは身体障害者中心なので、知的障害者のスペシャルオリンピックスも、明るい視点から取り上げてほしい。ただ、スタジオに障害者の方が出演しているのはすばらしいと思うが、ナレーションにエンターテインメント性は必要だろうか。障害のある家族がいて苦しい思いをしている人も多いので、そのバランスを配慮してほしい。

- 「バリバラ」は、粘り強く取り組んでいるということに改めて敬意を表したい。“きょうだい”の悩みについて大変説得力のある番組だったと思う。番組では、「あなたならできる」というアプローチや、意思を引き出せるコミュニケーション方法の重要性が語られていたが、社会全体でも取り組むべき課題として意識をしていかなければいけないことだと思う。大変いい番組だったと思うので、これからも頑張ってもらいたい。
- 一つの家族で同じ時間を過ごしても、受け取るものはさまざまで、ディレクターが番組を作ることによって、姉が受け取ったものと自分が受け取ったものをつなぎ合わせようとしていたのではないかと思う。継続的に、お姉さんが社会参加しているときの笑顔などを見たいので、続編を企画してほしい。
- 重度の知的障害のある姉を家族に持つディレクターが作っただけあって、説得力のある番組だった。番組に協力した家族の決断にも敬意を表したい。非常に重いテーマだが、明るさを失わず、なぜかいつもの「バリバラ」よりもフラットな気持ちで見られた。番組は、子どもの頃を振り返り、母親がお姉さんにかかりきりで、嫉妬の感情からお姉さんを嫌っていた時期のことや、やってはいけない意地悪などのディレクターの告白から始まり、生まれて初めて弟さんとお姉さんのことについて話し合い、「街の人の視線が気になる。」「お姉ちゃんが人と違うことを知られたくなかった。」など、ストレートな思いが心に突き刺さった。ディレクター以外の別の“きょうだい”たちも、町の人たちから受ける視線に悩み、その思いを友人などにも伝えにくいということだった。玉木さんの「21世紀の今、“きょうだい”がいつまでも障害のある人の世話をしなければならないというのは過去の話。しんどい時はしんどいと言えばよい。」というコメントに感動し、そこから引き込まれた。後半、ディレクターが施設を訪れ、お姉さんのはつらつとした姿を知り、そこには、自立を意識したプロの職員の手助けがあって、お姉さんたち、障害のある人たちは元気よく「自分のことは自分

でできる」と言っていた。実際にはつらつとして、うそ偽りのない喜びに満ちあふれた顔があった。そして、ディレクターはお姉さんに初めて一緒に出かける提案をしたが、「行く」、「行けない」の自問自答の中にお姉さんの精一杯の思いが詰まっていた。テーマパークの名前を繰り返し言うのはまさに意思表示だと思った。今回は下北沢までの散歩だったが、大阪のテーマパークまで行く企画を是非見たい。これまで「バリバラ」を見た中で最高の番組だった。

- 今回の「バリバラ」は、障害のある兄弟姉妹を持つ方の悩みがテーマだったが、視聴した人それぞれの立場で、自分のことに置き換えて考えることができた番組だったのではないかと。若手のやる気を奪ってはいないか。決まったことを渡すだけになっていないか。自分としては常に悩むところだ。障害のある方が家族にいる家庭の悩みは、どれだけテレビで見ても、当事者でないと理解しきれないと思う。また当事者も、きっと表面的なことばでは言い表せない部分もあると思うし、今回は悩みを述べるだけにとどまったが、将来のこと、経済的なことまで考えたら、まだまだ重い問題だとは思っている。しかし今回、少なくとも、ある面で共感を持てたことによって、親近感を抱くことができた。お互いの個性を認め、優しくも厳しくも、人格を持つ個人として尊重し接することが大事なことだと思った。最後に、今回の番組に流れるすがすがしさは、ディレクターの若い感性があったからこそだと思う。気負うことなく、最後まで気持ちよく“気楽に”見ることができた。またいつもながら、玉木さんのあたたかさ、健常者と障害者の懸け橋としての存在感にホッとした。

- 障害のある人の“きょうだい”の気持ちや悩みについて考える回で、NHK入局2年目のディレクターが、知的障害がある姉をもつ“きょうだい”当事者として企画・取材していたが、番組制作に協力したディレクターの家族の勇気とディレクターの制作者魂に感服した。

(NHK側)

「バリバラ」は、この1年、身近にいるはずなのに、社会の表に出てこない障害や問題に取り組み、そのことばを知ってもらおうという試みを続けている。例えば、場面かん黙やトゥレット症候群という症状は、街で目にすることがあるが、その病気の実態がわからないまま差別的な目で見られていることもあるので、まず知っていただくことが問題の解決の一步につながるということで、番組で取り上げてきた。今回の“きょうだい”についても、恐らくここにいる方々の親族や友人に“きょうだい”はいると思うが、その人

たちがどのような苦悩を抱えているかはなかなか表に出てこない
ので、引き続き考えていく。今回、インターネット上で“きょうだ
い”ということばが話題になった。そうしたことも含めて、今後も
取り組んでいきたい。それを社会に定着させるとともに、一緒に考
えていくことで社会の改革につなげていくことが最終目的だと考
えている。

(NHK側)

これまでの福祉番組と違うところは、あくまでも当事者の目線
に徹底的に立ち、バラエティーという演出スタイルをとっている
ことだ。時事的な内容もあるが、当事者の人たちが悩んでいること
や気になっていることをテーマとして取り上げてきた。スタジオ
では、障害者やセクシャルマイノリティーなどの当事者がマジョ
リティーになる場所を作り、ナレーションでは、言語障害のある俳
優・神戸浩さんが、暗くなりそうな話題でも明るくして、番組の色
を作っているところもある。ただ、テーマによってはアナウンサー
に読んでもらうこともある。今回は、番組の冒頭から“きょうだい”
からの厳しい意見を紹介したが、当事者の人たちがたくさん見て
いるので、そこに対してしっかり答えられるものにならないと、放
送には出せないと思っていた。今、地域の中で、障害のある人たち
も暮らしていけるようにしようという流れがある中でも、現実には
家族にかなり負担が大きいし、ディレクターに限らず、それに対
し“きょうだい”が直接コミットしないままでいるところがあるので、
お姉さんときちんと話をするところから制作がスタートした。
テーマパークの話は撮影の時に初めて出てきた話だ。今回、ディレ
クターもお姉さんと関係が作れていないということに気づいた部
分もあるし、番組を見た人の中に「うちはそんなに簡単ではない」
という思いを持った人もいると思う。それに対しても考えていく
ヒントを出していく必要があると思うので、今後もしっかり取り
組んでいきたい。

(NHK側)

今回の「バリバラ」は、障害者の家族を取材対象にして、家族の
問題や、親子の問題、社会の問題など、普遍的な問題に取り組んで
いるところに、一つの意義があると思う。これからも継続していき

たいと思っている。「真面目に“ぶっ飛んでいる”」のがNHKらしいという意見をいただいたが、チャレンジをしていくことが大事なことだと思うので、今日皆さんから頂いた意見を参考に、さらに番組、いいニュースづくりに役立てていきたい。

<放送番組一般について>

- 12月4日(火)の「ニュースKOB E発」を見た。神戸アイセンターの患者の生活を支援する施設を紹介した企画は興味深かった。引き込まれたのは「匠(たくみ)」のコーナーで、今回はクレーンのオペレーターの仕事が紹介されていたが、もし過去放送分のストックがたくさんあるようならば、小中学生が将来の職業の選択肢を考えるうえで最適な教材になると感じた。夜、食事をしながらNHKを見ることが多いが、全国放送の番組からローカル放送に切り替わる際のマイナー感を残念に感じる。神戸は洗練された生活文化を誇る街であり、ファッション都市、デザイン都市でもあるので、アナウンサーにもきちんとしたプロのスタイリストをつけて、スタジオのセットなどもより洗練された神戸らしいものにしたらよいのではないか。NHKのセンスは神戸局から生まれるといった感じで、全国放送をむしろ牽引する存在になれば、神戸の視聴者はより誇らしい気持ちになると思う。
- 「ニュースKOB E発」の神戸アイセンターのニュースは、貴重な情報だと感じた。この特集は、ほかの特集と同様、10分程度だったと思うが、1人の患者を追いかけていたので、途中で注意がそれてしまった。一方、12月12日(水)の「おうみ発630」の10円たこ焼きの特集は、興味を引くポイントが随所にあったように思う。「ニュースKOB E発」の「匠」のコーナーは、映像と文字だけで構成されていてとても美しく、メッセージ性が高いと感じた。12月7日(金)の「あすのWA!」の「きらり紀州人」で、インタビュアーが緊張しすぎていたので、もう少しリラックスしたほうがメッセージは伝わると感じた。12月12日(水)の「ならナビ」の農業女子の企画は、映像がきれいだったが、スリランカ出身の女性が日本の農業に従事するというだけでニュースになるのかと思った。12月3日(月)の「ニュースほっと関西」は、可もなく不可もないと感じながら見ていた。ただ、男性はスーツなのに、女性のアナウンサーの服装はいつもふだん着のようで気になる。もう少し大人の女性のイメージを演出してもよいのでは思う。
- 大津局の「おうみ発630」と「ならナビ」を続けて見ると、奈良らしい、ほのぼのとしたニュース番組だと感じた。「ならコレ!」で、既婚のスリランカ女性を紹介

するのに使われた「農業女子」という表現だが、はやりの「～女子」「～男子」のいい方は、安易に使うべきことばではないように思う。また印象として、恋愛対象を想起させるニュアンスも含むので、腰を落ち着けてじっくり農業に励まれようとしている女性を紹介することばとしてはふさわしくないと思う。また、「農業女子とは農業の分野で活躍する女子のことで、いま注目されています」との説明もあったが、定義であるかのように言い切ってしまうのだろうか。そのほか、ニュースの映像で気になる点が2点ほどあった。近大医学部奈良病院の会見映像では、会見場の様子は入れずに、ストレートに院長の話に入ったほうがわかりやすかったと思う。また、ポインセチアの展示映像で「色とりどりの」という字幕スーパーの背景の映像はほぼ赤と白のポインセチアしかなかった。また、最後のカットは動きの少ない落ち着いた映像で終わったほうが余韻を楽しめたと思う。時折流される「なつかしの映像」は、20～30秒ぐらいの大好きなコーナーだ。ふるさとの歴史や風土を再認識するという意味で、どんどん流してほしい。天気予報では、櫻井幸彦さんの視線はカメラ目線で、手は背景の天気映像のほうなので、櫻井さんの顔を見たらいいのか、手の示すほうを見たらいいのか落ち着かない。天気図を示して説明するときには、櫻井さんも天気図に視線を向けたほうが、わかりやすい解説になると思う。

(NHK側)

「農業女子」がニュースになるのかという指摘については、明日香村が、他地域からの定住に力を入れているので、そういった意味合いも含めて、もう少し丁寧にプレゼンテーションしていけばよかったかもしれない。奈良県北部の話題や、神社仏閣や遺跡のニュースが多くなりがちだが、南部との差が大きいので、中南部の話題や神社仏閣以外の話題もできるだけ取り上げている。

- 「ニュースほっと関西」はテンポがよく、安心して見られた。さまざまなジャンルの話題があり、もともと興味がなくても興味が持てるようなニュースもあり、あっという間に見終わった。12月4日(火)の「ニュースKOBEBE」は、拳銃の偽造のほか、指定暴力団関連が2つなど、暗いニュースが多く、見ていて少し長く感じた。いずれも大事なニュースではあるが、県内の季節感のあるニュースなど、ほっこりするニュースがあればよかった。例えば、12月4日の気温は20度を超えたので、真夏のような1日だったことをインタビューなどで伝えたらよかったと思う。コメンテーターなしで、30分の番組をうまく構成することは難しいので、ホームページで動画も紹介されている「匠」のコーナーを設けることで、見やすくなると思うが、7つのニュースはかなり多いと感じた。

(NHK側)

事件事故などが多い日もあるが、番組では温かいニュースもできるだけ取り入れながら、幅広い内容にしていきたい。神戸局では全国の地域放送局に先がけて8Kコンテンツの制作に取り組んでおり、今年度は「匠」シリーズ。伝統工芸の分野だけでなく、パントマイムのいいむろなおきさんや、老舗の帽子専門店のデザイナーの方など、さまざまな技術を持った方を取り上げて月1回制作し、「ニュースKOB E発」でも紹介している。指摘のあったキャスターの服装やスタジオのセットについては、来年度に向けて検討していきたい。

- 「ニュースほっと関西」を見ていて、ローカルニュースとして違和感はなかったが、事件事故、文化、スポーツ、季節の話題などに加え、2019年度後期の連続テレビ小説「スカーレット」についてなど少し盛りだくさんにも感じた。また、曜日ごとにテーマを設定して、例えば、文化のテーマの日には美術館特集を少し深掘りするなど、視聴者にとって身近で役立つ情報も入れてほしいと感じる。その後続く「ニュース7」で大相撲の話題がトップニュースとなっているのを見た。たびたびトップニュースになるようだと、オーダーについて少し検討したほうがいいのではないかと思った。
- 「ニュースほっと関西」を見た。後半の大阪府向けの放送の「関西空港国際線の出発エリアでの農産物販売」のニュースは、帰国時に検疫に引っかかるかもしれないなま物を日本出国の直前に観光客に売るといふかなり思い切ったことをしており、これからうまくいくのだろうかと感じた。有田市認定みかんのニュースは市を挙げてみかん農家の保護と育成に携わっていて素晴らしいと思ったが、こうした大阪以外の話題などを大阪府向けの時間帯に放送するのはなぜだろうか。NHK大阪放送局は近畿地方の中心的存在なので、これからもしっかりと取材に基づいた番組の制作と放送をお願いしたい。

(NHK側)

特集は記者やディレクターが取材した映像をもとに、視聴者がわかりやすく、興味を失わないように適正な長さを見極めながら編集している。また、「ニュースほっと関西」で和歌山など他府県の話題を大阪府域向けに放送することについては、大阪局としては、後半も含めて近畿全体のニュース番組として制作している。女

性アナウンサーの服装について、意見を参考にしたい。また、スタジオは、新年度に向けてリニューアルを検討している。

- 出張に行くと、必ず午後6時半にはホテルに戻って各地のニュースを見て楽しんでいる。「おうみ発630」は録画して、寝る前に毎晩きょうのできごとを確認している。10円たこ焼きの男性は地元では有名だが、知らない人もいたので紹介してもらったことに感謝している。最近の名物コーナーは天気コーナーだ。滋賀県民にとって天気は本当に重要で、東西に長く河川が多いので、滋賀県は天気にもつわることばもたくさんある。川ごとに気候が変わることや、階段のように雪がふえるところだが、そういったことを検証していておもしろい。担当している気象予報士の石井元樹さんは本当に好感度が高く、語り口もおもしろい。今回「ニュースKOB E発」も見てBGMがおしゃれだと感じたが、「おうみ発630」はシュールなだじゃれが飛び交っていて、掛け合いがおもしろいと思う。ビデオ投稿のコーナーで一般の方が映像に映り込んでいることがあるが、本人も知らないうちに放送されていることもあるかもしれないので、注意してほしい。
- 「おうみ発630」と「ならナビ」を見たが、社会ニュースが並んでいて、全体の流れとしては可もなく不可もないと感じた。「おうみ発630」では、例えば滋賀県の甲良町の町長と議会との対立はかなり根が深いと思うが、町長の報酬カットを淡々と伝えていた。その後のフォローはされてるのか気になった。10円たこ焼きの話題は心温まる話で、店主の水野晃男さんを含めて地域の方々が支えているというニュースだった。このような地域の人たちのさまざまな志、ネットワークがどのように広がっているのかを掘り下げて取材してほしい。

(NHK側)

「おうみ発630」では、毎週火曜日「しがリサーチ」というコーナーを設けていて、ニュースをさらに掘り下げその後の展開も伝えている。10円たこ焼きの話題は評判になって、放送後に応援したいと申し出もあった。その日の「ニュースウオッチ9」でも全国放送されて、かなりの反響があったと聞いた。また、気象予報士の石井さんは、「おうみ発630」だけでなく、正午前にも県域向けに天気予報を出している。2018年の台風の際も、滋賀県向けに大規模に情報を発信した。

- 12月4日(火)の「ニュース630 京いちにち」で、世界最大のホテルチェーン

が京都府内の3か所に開業するというニュースが取り上げられていたが、冒頭で紹介されたイラストがどこのエリアのホテルなのかわかりにくかった。南山城村の村長や住民のコメント、お茶の生産体験ができるプランが紹介されていたが、それ以外の京丹波町、宮津市の人たちの声やプランについても知りたかった。地元の間人はホテルを利用しないが、ほかのエリアの知人に質問されることが多いので、今後の動向を特集してほしい。「京都カルチャー」のコーナーで、脳梗塞の後遺症を乗り越えて作品作りをする画家・河村武明さんのことを丁寧にレポートしていて、作家自身の人柄や思いがよくわかってよかった。実際、河村さんの個展に行ってみたらいろいろな作風の絵があったので、作品のことももう少し紹介してもらえたらよかったと感じた。番組の最後に必ずきょうのおさらいがあるが、30分の番組に必要なのだろうかと思う。

- 「ニュース630 京いちにち」を見た。番組で触れられていた北海道大学の遺骨返還のニュースは先に知っていたので、京都大学でも琉球王家の遺骨の返還をめぐって同様のことがあったのかと思った。大学側が謝罪しない理由について取材を重ねてほしいと感じた。世界最大のホテルチェーンの進出の話題については、京都府の地域振興政策と、京都市の思惑と、地元の期待のそれぞれが少しずつ違うと思うので、その点をもっと少し報道してもよかったと思う。インタビューで名前のテロップを出すタイミングが少しずれていたのが気になった。竜巻注意情報を伝えていたが、台風情報や地震情報などと違って理解しにくいので、イラストや実際の雲の様子などを見せてもらいながら、どういう雲行きになったらさらに危険なのか、どういう避難をすればよいのかを知りたい。実際、竜巻による被害を目にしたことがあるので本当に怖いことは知っているが、竜巻注意情報が出ても、イソップ童話の「おおかみが来るぞ！」のようになってしまいかねない。また番組の冒頭などで使われるお天気カメラの映像が四条大橋の映像ばかりなのは残念に思う。

- 12月27日(木)の「京いちにち 年末スペシャル」(総合 後 6:10~7:00 京都府域)では、京都のいろいろなことが紹介されていたが、この1年の振り返りにとどまらず、災害や今年積み残した問題も紹介しながら、行政でお金をかけて行うことを伝えるなど、来年の展望や課題もよくわかった。

(NHK側)

世界最大のホテルチェーンの開業のニュースは、取材にあたったのが京都府南部の担当の記者だったので、南山城村のケースが中心になった。大きなニュースなので、今後も3か所の計画を引き続き追っていきたい。きょうのおさらいについては、番組の途中で

帰宅する視聴者から「きょうはどんなニュースが放送されたかを知りたい」という声もあり、そのあんばいは検討している。竜巻注意情報については、大津局や和歌山局のように、来年度から専属の気象予報士によるよりきめ細かな気象情報を届けていく予定だ。

(NHK側)

和歌山としては地元の魅力を地元の人にまず知ってもらうという大きな目的がある。かなり以前から「防災豆知識」は毎日放送していて、新年度もリニューアルしてさらにいいものにしていこうとしている。防災に関するニュースは、一日一本必ず入れることを目標としていて、今後も県民の防災意識を醸成していきたい。

(NHK側)

NHKは、現在3つの大きな経営方針を立てていて、そのうちの大きな課題の一つに地域改革がある。地域改革とは、県域向けのローカルサービスを中心に、視聴者のニーズにあった情報をきめ細かく届けて、サービスを充実させていこうという考えだ。全国54局の放送局のネットワークを生かしていくことが、NHKの最もいいところで、これだけの規模のローカルネットワークを持っている放送局は世界でもあまり例はない。視聴者のニーズに合わせて、きちんと充実させていきたいと思っている。指摘のあった、県域ローカルに変わるときの「マイナー感」は出ないようにすることは課題の一つでもあるので、服装やスタジオの印象などについても考えていきたい。また、ニュースのオーダーに関する指摘については、ニュースの価値も含めて、一般の人たちの興味はどの辺にあるのかということなど、工夫をしているところで、いろいろな意見を頂きながら改善していきたい。また、NHKは報道機関として放送の自主・自律は生命線だと思っていて、信頼される公共放送を維持するために不可欠なものだ。公平・公正であること、不偏不党であること、そして、放送の自主・自律を貫いていくことが、基本中の基本だと全職員が肝に銘じているので、さまざまな意見や批判も頂きながら、そうしたことをきちんと実現し、守っていけるようにしていきたい。

- 12月23日(日)の「女子第30回全国高校駅伝」(総合 前 10:05~11:54、ラジオ

第1 前 10:05~11:55)、1月13日(日)の「第37回全国都道府県対抗女子駅伝」(総合 ラジオ第1 後 0:15~3:10)では、NHKがありのままのレース展開を伝えていたのはよかった。民放では作り込んで、あおるような実況をすることもあるが、見ている人にとってはもちろんのこと、特にアスリートの今後のことを考えると、しっかりとした結果を淡々と伝えることが大事だと思う。

- 12月31日(月)の「第69回NHK紅白歌合戦」はとてもよかった。NHKの枠にはめず、アーティスト本来のステージに近づけていくような感じの設定ができていたように感じた。また、知らない世代にもわかるような構成や内容になっていた。単なる歌合戦ではなく、平成の締めくくりに、今の日本の文化をいろいろと紹介できていたと思う。
- 最近のNHKの番組はおもしろいと感じており、NHKスペシャルや特集番組に感心している。その一方で、民放のようにタレントが場を盛り上げるような番組もある。視聴率も重要な評価指標だが、ビジネスモデルが民放とは根本的に異なるNHKだからこそ、感性と信念と哲学でよりよい番組作りをしてほしいと思う。

(NHK側)

タレントに出演してもらうことについての指摘だが、NHKの番組は、若い人たちがあまり見なくなっているという現状もあり、どうしたらもっと見てもらえるようにするかという工夫をしている。その取り組みの中で、試行錯誤しながら、チャレンジをしていきたいと思っている。

- 12月31日(月)の「ゆく年くる年」(総合 後 11:45~1月1日(火) 前 0:15)で、興福寺の中金堂が紹介され、うれしく思った。各地をつなぐため、短時間になるのはしかたないが、大きな番組でも紹介してほしいと思う。なお、「中金堂」「法相柱」などのテロップの背景が、青海波と市松模様にキラキラ星が輝くようなデザインで、正月のおめでたい気持ちはわかるが、「ゆく年くる年」の落ち着いた番組作りとは少し合わないと感じた。

NHK大阪放送局
番組審議会事務局